

「困った子」への対応を考えるためのメモ

2023年9月3日

- 1 誰が困っているのか。本人か教師か親か。
- 2 なぜ困るのか。システム構造（目的・児童生徒対教師の人数・授業形式等）の問題かもしれない。
- 3 30人に一人だけ走り出ていく子がいると→問題児になる→特別支援対象になる→その子の「治療」になる。→肯定感を喪失する。
※「ゴチャマゼ」という前代未聞の手法がある。
- 4 花まるエレメンタリースクール（吉祥寺）で起こったこと
2022年4月、24名の小学生（1～6年生、全員不登校。数年間行けていない子が大半。ほぼ何かの「症状名」をつけている）24名でスタート。全員が毎日（週4日）通い続け、一年間終了。
2023年4月、65名に増加。全く同様の子たちばかり。学校復帰以外では一人も辞めず全員毎日通い続けている。
- 5 なぜこうなったか。
 - ① 愛を信じた。手のかかる問題児という目で見られない。
 - ② 複数担任（24人に4人）制。「お客さん」にならない。教師の役割の1は、「子を良く見ること」。複数担任で可能になっている。
 - ③ 担任たちは、「朝から晩まで」子のことを話し続けている。
 - ④ ただの居場所にしない。「基礎学力をつける時間」も「熱中没頭する時間」も創る。
 - ⑤ ゴチャマゼの良さ。自分だけ変→みんなが変。
 - ⑥ フロス（グループ内のNPO。特別支援の専門機関）という、頼れるブレーンの存在。
 - ⑦ 地域に溶け込んでいる（遠足・バザー等のイベントで可愛がられている）
 - ⑧ プロジェクトを大事にしている。
 - ⑨ 発表・議論・決定（校則無し）を大事にしている。
 - ⑩ 子にとって大事なこと→「自己肯定感」「社会的自信（何か一つの好きで得意で没頭できること）」「親の安定」
 - ⑪ 親の「過保護・過干渉」とは戦う
 - ⑫ 症状名より、目の輝き。